The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	アルメニアのポップフォークにおける政治性 : ユーロヴィジョン・ソング・コンテストを中心に
Author(s)	木村, 颯
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2022, 5, p. 31-34
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87126
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

アルメニアのポップフォークにおける政治性
―ユーロヴィジョン・ソング・コンテストを中心に―

音楽学　博士前期課程２年
木村　颯

はじめに

ユーロヴィジョン・ソング・コンテスト（Eurovision Song Contest, 以下 ESC）は欧州で行われているポピュラー音楽の祭典である。1956 年に第一回大会が開催され、以降年に一度の恒例行事として行われてきた。欧州放送連合（European Broadcasting Union, 以下 EBU）に加盟する放送局によって選出された各国の代表が一堂に会し、その年の一位を決める。国の代表が競い合うというコンテストの性質上、国際的な政治問題やナショナリズムと結び付けることが容易に可能だが、大会の政治的利用は規約によって禁止されている。しかし実際はこれまでに様々な政治問題が前景化し、議論を呼んできた。

ソ連崩壊以降、旧東側ブロックの国々が相次いで新たに ESC に参加してきたが、黒海とカスピ海に挟まれたコーカサスと呼ばれる地域に位置するアルメニアも 2006 年からこの ESC に参加している。ESC で披露される楽曲は、欧米を中心に発展してきたポピュラー音楽という枠組みを踏襲しているものの、国としての個性を出すことを求められた結果、ポピュラー音楽と民俗／民族音楽が融合した楽曲も数多く見られる。「アルメニアの」ポピュラー音楽として大会での存在感を高めるために、アルメニアも様々な形で「アルメニアらしさ」を持つポピュラー音楽を検討してきた。単なる商業音楽を越え、「国の代表」という概念を付与された楽曲及び歌手の中には、その自覚を強く持つがゆえに政治的な問題に発展するものも存在する。

本研究では、まず ESC のアルメニア代表がポピュラー音楽と民俗／民族音楽を融合させた事例に焦点をあて、そこでどのような表現方法がとられたかを検討する。その事例に関連して、ESC において起こったアルメニアとアゼルバイジャンの政治的対立について検討する。最後に ESC 出場歌手のその後の活動を追うことにより、ポップフォークが民族主義と結びつく可能性を示唆する。

ポップフォークと ESC アルメニア代表

本研究では、音楽的、主題的側面において民俗的／民俗的な要素を含みつつ、それらをドラムとベースを核とする西洋ポピュラー音楽の様式と融合させた音楽を「ポップフォーク」とする。アルメニアには、「ラビズ」というジャンル名のポップフォー

クが存在する。メリスマ（一音節に対して複数の音符を当てはめる装飾的な歌唱法）やマカーム（イスラム圏でみられる旋法）の使用がラビズの主な特徴であり、これらはオスマン帝国時代に由来するとされる。苦悩や恋愛を歌い大衆の心情に寄り添ったラビズの世俗的な歌詞は、社会主義の精神にそぐわないものとしてソ連時代には知識層から批判されてきた。ソ連崩壊後は批判の矛先はその「トルコ性」に向かい、第一次世界大戦下のアルメニア人虐殺と 90 年代のナゴルノ・カラバフ紛争によって形成された反テュルク感情と結び付けて語られるようになった。一方でラビズは今日でもアルメニアの大衆を惹きつける音楽として一定の存在感を保っており、その人気は YouTube やソーシャルメディアで可視化されるようになっている。

このように、ラビズは現在その「トルコ性」が主な批判の対象となっている一方で、歴代の ESC アルメニア代表にもメリスマやマカーム、民俗楽器の使用といったラビズと同様の特徴を持つ楽曲が存在する。

アルメニアの ESC 初出場となった 2006 年にアンドレが歌った *Without Your Love* は、「モダンな西洋音楽と伝統的なアルメニア音楽のユニークな混合物」として紹介される。歌詞の内容は普遍的なラブソングだが、自然的短音階のうち第六音を抜いた音階に基づく旋律や民族楽器を模したサウンドと装飾音の使用によって他国との差別化を図ろうとしている。民族的な要素を視覚的側面まで拡大させたのが 2008 年のシルショである。シルショが歌う *Qele, Qele* の公式 MV では、両面太鼓ドホールがフィーチャーされ、聴覚と視覚の両面から「アルメニアらしさ」を表現しようと試みている。またシルショは曲の冒頭でメリスマをふんだんに用いたアルメニア語の朗誦を披露する。2009 年のインガ＆アヌシュの楽曲 *Jan Jan* では、舞曲風の 8 分の 6 拍子、五音音階に基づく旋律、民族衣装を模したステージ衣装など、様々な側面で「フォーク」の要素が色濃く出たパフォーマンスとなっている。2009 年以降は「民俗的」な要素を用いることは限定的になっていき、曲中で装飾的に民俗楽器が用いられる程度になっていった。一方で、2015 年のジェネアロジーが歌う *Face The Shadow* は、1915 年に始まったオスマン帝国によるアルメニア人虐殺という「民族的」な主題を歌ったものである。

ナゴルノ・カラバフを巡って

アルメニアが抱える大きな政治問題として、隣国アゼルバイジャンとの間で領有権を巡り紛争状態にあるナゴルノ・カラバフ問題が挙げられる。南コーカサスがソ連に組み込まれたときに、アゼルバイジャンへの帰属が決定されたカラバフだが、もともとアルメニア人が多く住む地域でもあり、同地域の帰属変更と民族自決はアルメニア側の悲願となってきた。ソ連から独立する前後の時期には、アルメニアとアゼルバイジャンの両者による武力衝突は激しさを増し、ナゴルノ・カラバフ紛争へと発展していった。1994 年に停戦が成立し、同地域の大部分はアルメニア側の未承認国家である

ナゴルノ・カラバフ共和国（アルメニア側の呼称はアルツァフ共和国）が実効支配することとなった。

2006年にESCに出場したアンドレはカラバフの出身である。ESCのホームページ上にある彼のバイオグラフィには、当初彼がカラバフ出身である旨が記載されていたが、カラバフ出身者がアルメニアの代表として出場していることを問題視したアゼルバイジャン側の抗議によりこの記載は削除されることとなった。

2009年のインガ＆アヌシュの楽曲*Jan Jan*は、アゼルバイジャンの作曲家トフィク・クリエフが作曲した〈ナヒチェバン〉という楽曲と酷似しており、〈ナヒチェバン〉を盗作したものではないのかという疑惑がアゼルバイジャン側より持ち上がった。YouTube上にはアルメニア側の盗作を裏付ける比較動画がアップされているが、実際にこれがアルメニア側による盗作なのか断定はできない。

2009年にはカラバフに関するプロパガンダも盛んに行われた。セミファイナルでのパフォーマンスの前に流れたアルメニアの紹介動画において、カラバフの中心都市ステパナケルトにあるモニュメント「私たちは我らの山々」の図像が使用された。アゼルバイジャン側はこれに抗議し、その後のファイナルで流れた動画では当該部分は削除された。しかし、アルメニアの得点発表時の背景と発表者が手に持つクリップボードの裏にモニュメントの図像が使用されており、アゼルバイジャン側はこれに強く抗議した。この時に得点発表を担当したのは前年のESCでポップフォークを披露したシルショであった。

2016年の代表であるイヴェタ・ムクチャンは、歌手の控室において「アルツァフ共和国」の国旗を掲げ写真撮影を行った。この行為は、アゼルバイジャン側のみならず大会の主催者であるEBUからも強く非難されることとなった。

代表歌手のその後

ESCの代表として選ばれたのちに、ポップフォーク路線を強めていく歌手や民族主義的な傾向を見せる歌手が一定数存在する。

2008年代表のシルショは、2012年に〈プレゴメシュ〉という楽曲をリリースする。この楽曲では民謡蒐集によってアルメニア音楽の確立に大きな功績を残したコミタスをポップフォークの素材に用いることによって、自身のポップフォークに民族的なオーセンティシティを付与することが試みられている。2016年にはフルアルバム『アルマト』をリリースした。アルメニア語で「ルーツ」を意味するタイトルのこのアルバムは、古代の叙事詩、宗教、アルメニア人虐殺など様々な側面からアルメニア人のルーツを探求する楽曲で構成されており、シルショのポップフォークにおける集大成とも言える作品となっている。2020年に起こった第二次ナゴルノ・カラバフ紛争では、シルショは自身のソーシャルメディアで積極的に反応した。2021年の議会選挙では紛争を受けて強硬派のコチャリャン元大統領が存在感を増したが、その集会でシ

ルショが登壇し群衆を鼓舞するようにポップフォークを披露した。

2009 年代表のインガ＆アヌシュは同年 11 月にアルバム『私たちは我らの山々』*Menq Enq Mer Sarerə*（英語名：『私の大地の心音』*Heartbeat of my Land*）をリリースした。表題曲〈私たちは我らの山々〉は先述したモニュメントのことであり、カラバフを巡る政治的な態度を改めて表明している。この曲の MV では、トラックの荷台に乗ったインガとアヌシュを金管楽器の楽隊が追いかけるシーンが描かれる。これはジプシーによるブラスバンドを一躍有名にした映画『アンダーグラウンド』のオマージュだと考えられる。ジプシーはバルカン半島のポップフォークにおける重要なアクターであるが、この MV の描写からインガ＆アヌシュのポップフォークがバルカンのそれを意識したものであることが推測できる。

2016 年の代表であるイヴェタ・ムクチャンは、2014 年の代表であるアラム mp3 とともに「ダシュテロヴ」というプロジェクトを立ち上げた。「ダシュテロヴ」とは「大地で」という意味であり、アルメニアの大地が育んできた文化を現代的な形で表現することを目的としている。

結び

アルメニアの従来のポップフォークであるラビズの持つマカームやメリスマといった特徴は「トルコのもの」として批判されてきた。一方で、同様の特徴を持つ ESC で披露されたポップフォークは「アルメニアを代表するもの」として内外に受け入れられている。このように ESC 出場を通して、音楽的な「アルメニアらしさ」が再考されているとも言える。ポップフォークを歌うことによって「アルメニアらしさ」を追求するなかで、歌手たちはときにアルメニアを取り巻く外交問題に対して政治的な態度を示し、ときに民族主義に傾倒していく現状がある。

本研究では、ESC のアルメニア代表になっている楽曲及び歌手について検討してきたが、ESC のアルメニア代表は現在視聴者投票による国内予選によって決定されている。また ESC の本選は EBU 加盟国の視聴者投票も採点に加味される。これらの世論がポップフォークやそこに表れる「アルメニアらしさ」をどのように評価しているのかを分析することが今後の課題である。

参考文献

Jordan, Paul. *The Modern Fairy Tale: Nation Branding, National Identity and the Eurovision Song Contest in Estonia*. University of Tartu Press 2014.
Vuletic, Dean. *Postwar Europe and the Eurovision Song Contest.* Bloomsbury, 2018.
West, Chris. *Eurovision! A History of Modern Europe Through the World's Greatest Song Contest.* Melville House UK, 2020.